10. SOL を有する肝疾患の ^{198}Au コロイドによる肝血流量その他について

板野　哲明　玉井　豊理　田辺　正忠
佐藤　功　竹田　芳弘　林　英博
山本　道夫　(岡山大・放)

肝癌は診断方法の進歩とともに切除可能例が増加して来た．しかし本症では肝硬変の合併例が多く手術適応の決定には残存肝機能の評価が重要な問題であり，^{198}Au-コロイドを用いて肝血流量の面より検討を加えている．

K 値の測定には肝脾上に matrix ROI をとり，それぞれの ROI の K 値を求めて解析した．正常者の K 値は 0.185±0.014 であった．

現在術前術後に測定しえた症例は少ないが術後経過良好例では術後に肝血流量の増加と脾血流量の減少がみられた．術後経過不良例では術後に肝血流量の減少または脾血流量の増加がみられた．

11. 骨肉腫骨シンチグラフィの臨床的意義

平木　祥夫　木本　真　森本　節夫
林　英博　青野　要　田辺　正忠
(岡山大・放)

最近経験した骨肉腫 8 症例の骨シンチグラフィをもとに，その臨床的意義を検討した．その結果，①著明な集積，辺縁不整な形状，濃淡のむら，中心部の cold area が全症例に認められ共通したパターンを示した．解像力の向上が著しい現在，ある程度の質的診断が可能と思われた．②骨転移巣は勿論，肺転移巣も従来報告されているよりも高率かつ小病巣も鋭敏，明瞭に検出され，断端再発巣もよく描出し経過観察の手段として有用であった．③手術部位の決定すなわち原発巣の正確な拡がりの診断はなかなか困難であった。

12. 骨内腫瘍発育におけるプロスタグラディンE値の変動と骨，骨髄シンチグラフィー

大塚　信昭　伊藤　安彦　長井　一枝
寺島　秀彰　柳元　真一　中野　靖子
(川崎医大・放・核)

癌の骨転移形成に果たすプロスタグランディンE (PGE) の役割ならびに治療方針樹立への寄与を目的として実験を行なった．

PGE の測定は Clinical Assay 社の RIA kit で行なった．正常家兎の血漿 PGE は 486.2±185.7 pg/ml (n=86) で，4 週間の観察で尿中 PGE の変動と一致した．大腿筋内 VX-2 移植では，腫瘍の骨浸潤を来たした骨スキャン陽性のものでは PGE の上昇が認められた．一方，骨スキャン陰性例では腫瘍の発育にともない PGE の上昇を認めたが，スキャン陽性例より常に低値であった．腸骨骨髄内 VX-2 移植群では骨髄スキャンのみ異常所見の認められた時期には PGE は上昇せず，骨スキャン陽性になってはじめて上昇が認められた．インドメサシン，抗癌剤の影響についても報告した．

13. ^{99m}Tc-DMSA による腎血流量測定の検討

棚田　修二　石根　正博　河村　正
中田　茂　八木　完　稲月　伸一
飯尾　篤　浜本　研　(愛媛大・放)
山本　皓二　(高知医大・情報部)
横山　雅好　(愛媛大・泌)

腎シンチグラフィ剤である ^{99m}Tc-DMSA を用いて腎血流動態の解析を検討した．方法は静注直後よりシンチカメラから Data 採取を行ない，両腎部，大動脈部に ROI を設定し，大動脈部を Input とし，両腎部で得られる Histogram から直接演算子法を用いて，伝達関数 h を求め，さらに腎の Model を設定し，両腎の平均通過時間，流入血流量比，予測摂取率比を算出した．同時に投与 2 時間後に腎の Imaging を行ない，川村らの方法に準じて摂取率を求め，上述の方法で得られた結果と比較検討した．対象とした症例数が少なく，明確な結論に達しなかったが，計算によって得られた血流比，および予測摂取率比と，実際の 2 時間後摂取率比との間には，相関がある様に考えられた．今後は，解析法の改良，および従来の腎機能検査成績と比較し，本解析法の有用性を検討したい．

Presented by Medical*Online